琉球大学学術リポジトリ

民族の記憶　－古老の語りを中心として－

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2010-10-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 辻, 雄二, Tsuji, Yuji
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/18247

民族の記憶 ―古老の語りを中心として―

辻　　雄二

Yuji TSUJI

1．はじめに

本稿でいう「記憶」とは、人の現在を含む過去からの営みと、その過程で得た認識のあり方を指し、それは人の一生という時間における無数の出来事と行為の中から、特定の事象について呼び覚まされたものであると考える。つまり「記憶」とは、語るという行為によって現れ出た表象であり、それが再構成されたものである[1]。そしてこのような記憶の担い手である個人とは、特定の社会集団に帰属し、絶えず影響を受け続けて存在するものであり、その意味からすれば、ここで語られる「記憶」を単純に個人的なものとすることは適切ではないであろう。

その一方で、このようないわば「個人の記憶」が、不可避的に作成されるものであり、虚構性を一定程度帯びることは否めないという事実から、特に共有される「集団の記憶」との対比においては何らかの差異を生むこともある。もちろんその差異そのものが、語り手によって如何なる意味づけが為され、あるいはどのような結果によるものなのか、それ自体が大変重要であることは言うまでもない。しかし、この「集団の記憶」が「個人の記憶」に比べ、過去の営みなりその認識のあり方に対してより忠実であり、前者が客観にして分析的であるのに対し、後者は主観にして本能的であるといった図式化は当てはまらないと考える。

たとえば明治以降の日本では、国民国家の形成において民族統一を基礎にならしめるべく、現実には異なる諸民族である存在を一つの民族に擬制していく方法がとられた。そのような方法に対し、ある種の合意を得た手順をもって権威づけされた神話的世界観が共有され、それに基づき編まれた「歴史」とは、いわば他者を如何にして学術的言説の中に閉じ込めるかという装置であったと言えよう。そしてこの「歴史」を公的な「集団の記憶」としたものが「国史」であり、この「国史」を共有する者が一体感をもった内なる国民であり、それはウチとソトを分化すると同時に、ソトに存在する者を明確に生み出すことでもあった。

このことからも、「集団の記憶」が「個人の記憶」に比して必ずしも過去の事実に忠実で客観的であると言えないことは明らかであろう。

つまり、如何なるレヴェルの記憶であっても「つくられたもの」という点においては同様であり、よってそこに優劣による判断は馴染まず、それは文字化された「歴史」という形をとったものであったとしても、それに対して優位に立つというものではないといえよう。

このような「個人の記憶」についての問題は、これまで多様な学問分野において注目され、具体的には聞書き調査といった方法で得られた記録資料が、回想・証言・ライフヒストリーといった形で文字化されてきた。そしてそれらは「物語り」のもつメッセージ性に重きが置かれ、独自の問題意識、あるいは分析や検討が十分になされてきたものであるとは言い難かった。そして一方、「学術的」にはそれら「新たに発掘された記憶」を用いて、そこから事例を抽出し例証や傍証としつつ、研究者の視点で分析・再構成がなされてきた。つまり一定の人々に共有される思考や行動規範、さらには行動様式が如何にして形成され、あるいは伝承されてきたかといった問題についての普遍化が試みられ、成果を積み上げてきたといえよう。しかしこのような広い意味での「文化」に注目するがゆえに、語られるひとつひとつの「個人の記憶」が有する多様な世界のもつ意味については取捨され、顧みられることは少なかっというのも事

実であろう。

このように「記憶」をめぐる問題は、聞書き調査を中心とした調査方法をとる学問分野においては、十分に注意されるべきものであり、なかでも名も無き人々が営む日々の営みに注目し、そこに見られる慣習や伝承される民俗事象を把握することを学問的意義としてきた民俗学にとっては看過できない問題である。いわば「伝承母体」あるいは「伝承主体」なりがもつ「記憶」の有り様こそが、その「物語る」内容を規定していることを考えれば、そこに十分な検討が加えられてしかるべき重要な問題であると考える[2]。

もちろんこれまでに民俗学の研究成果として、稲作を中心とした伝統的農業形態を有する村落や、そこに暮らす家族などにみられる伝承性について注目した、伝承母体論なども提示されてきた。また、これまで宮本常一をはじめ、多くの研究者が試みてきたように、個々の「物語り」を一片として、それを複数集めて「全体」を再構築しようという試みも見られた[3]。しかし物語られる「個人の記憶」とは、本来異なるレヴェルに位置するものであり、つまりそれぞれの領域のうちにありながら、一つの世界を成しているものであることを確認しておかなければならないであろう。ここで言う一つの世界とはそれぞれが過去に対して抱く知識や思いによって編まれる知の集合体のごときものであると考える。だからこそ「個人の記憶」とは多様であり、ゆえに限られた時空間に閉じこめられることなく、遙か遠く先祖の生き様にまで遡り、そこに想いを馳せることができるのである。それは秩序を持たされた「全体」における、権威をもった過去についての見方やあり方とは明らかに異なる存在であることを認識せねばならない。

そして伝説や世間話といった口頭伝承の分野においては、「伝承主体」自身の手によって文字化がはかられ、内容について解釈の異なる複数の伝承が確認され、その要因の解明を行うなどの研究成果が上げられている[4]。さらに聞書きの場における主観の問題や語り手の属性といった問題についても注意が喚起されてきた[5]。しかしながら、いずれの問題についても明確な形でその答えを用意するには至らず、特に口頭伝承の分野を除くと、物語られる「個人の記憶」について取り上げられることはほとんどなかったと言えよう。

本稿ではこのような情況をふまえ、民俗社会に生きる語り手の「個人の記憶」を精確に書き留めることに腐心し、その語られる多様な世界を再構成し、そこから新たな視点を導き出すことに努めることとする。それは伝承される「全体」がどのように創出され、展開・定着していくものなのかを見極めることにも繋がるものであると同時に、それとは異なる形で存在する「民族の記憶」を確認することでもある。つまりこの試みは、「全体」が決して「個人の記憶」の単純な集合体からなるものではなく、時には相対峙し得るこの両者の関係性を明らかにすることでもある。

2．蘇生される記憶

古老は70歳の祝いを一昨年迎えた[6]。語り始めた彼は、記憶の糸をたぐりながら、時の流れに思いを馳せた。

彼には八つ違いの兄がいた。幼い頃からラマ僧としての修行をつむため、西ウヂムチンのワングン・スム（王府廟）に預けられていた。その兄はラマ教の学僧となり徳をつんだが、49歳の若さで亡くなった。モンゴルでは「一門から九人の僧侶が出たら、その一族は天に通ず」と言われ、ボルハン（御仏）に子供を捧げることで、本人のみならず親族までも皆天国にいくことができると信じられてきた。彼が大切にするホーログ（嗅ぎ煙草容器）には、西方浄土の故事に因んだ絵柄が描かれている。それは彼らラマ教を信ずる者にとって、聖地であるチベットのポタラ宮の図であった。一生のうちに一度は訪ねてみたい聖なる巡礼地である。幼い頃から毎日ボルハンの話を聞き育った彼ではあるが、特別に信仰に篤いというわけではない。しかし兄が死んだその時には、遥か彼方を望み、彼の地ポタラ宮に拝礼したいという思いを胸に抱いたという。そして「羊の世話をするうちにこの歳になってしまった」と笑いながら話す彼の指が、ホーログにその思いを念じ込めるようにさすっていた。

彼は兄の死と父親の死をテンゲルト・ハリト（天に飛ぶ）といい、「自分もまもなく天に飛ぶ」と笑顔ながらにいう。「天に飛ぶ」とは、テンゲ

ル（天）を信仰するモンゴル民族にとって、その魂の行方が天空の彼方なのであろうことを実感させる。彼の目には家から遠く望まれる丘の南斜面に眠る、父の魂の行方が見えているようでもある。

そんな彼が初めてその天を舞う飛行機を目にしたのは、草原の遥か彼方からやって来た日本軍の軍用機であった。

ある日のこと、南の空から日本の軍用機が飛んできた。初めて「オンゴチャ（空の船）」を見た瞬間である。その音に驚き、父親に手を引かれて急いでゲルに戻ると、ゲルの側壁にへばりつき、フェルトの隙間から覗き見その行方を追った。同じアイル（集落）に住む隠居した老人が「スニトの徳王が主席になって、この草原に新しい国を造るといっとる。ダーワン（大王）が日本に逆らったから、こんなことになったんじゃ。」と噂し、アイルでは暫くいろんな情報と憶測が飛び交い、子供心にも未だかつて見たことのない、まるで寝物語に聞かされてきた昔話に出てくるシッディキュル（鬼）のような恐ろしい男達がすぐ近くに迫っているような怖い思いをしたという。

そして忘れられない思い出のもう一つに、従兄弟の見せてくれた世界地図がある。

彼の従兄弟はそのアイルからただ一人だけ中学校へ通っていた。そして時折戻ってくる従兄弟の話は、彼のみならずアイルの皆にとって、それはそれは物珍しいものであった。初めて見た世界地図なるものも、その従兄弟が学校から持ち帰った品であった。「緑色に塗られたロシア、樺色が支那、そして赤色が日本だった」と明確に話す彼にとって、その鮮明に色分けされた世界地図が与えた衝撃はいかばかりであったろうか。そして同時に自分たちの立つ大地が地球という丸い形をしたものの一部であると聞かされた事実が、彼の記憶に大きな影響を与えたことは容易に想像できる。そして、それまで一度として耳にしたことのなかったモンゴルの英雄チンギス・ハーンの話もその従兄弟によってもたらされた新たな衝撃的事実の一つであった。

モンゴルの草原にソルガゴリ（学校）ができると、それまで皆の尊敬を一身に集めていたアイルの物知りに代わって、ソルガゴリに通う者が権威ある存在とみなされるようになった。学徳を重んじるモンゴルの人々にとっては、ソルガゴリは権威の象徴であったとも言える。それは草原に初めて開かれたソルガゴリに通う者が、ノイン（役人）とバインフン（分限者）の子弟ばかりであったことからも伺いしれよう。そしてソルガゴリの教師は日本人と、バトハガルカ（張家口）の学校からやってきたモンゴル人であったという。突如として草原の中に建てられた煉瓦造りの学校は、草原の人々にとって何もかもが新鮮で、興味の的であった。そして学校の壁高くには、それまで見たことのない髭を蓄えた一人の人物の肖像画が掲げられ、その民族衣装を身に纏った人物こそがモンゴルの英雄であり祖先であると生徒達には教えられた。その肖像画の人物こそチンギス・ハーンであった。それまでゲルに飾られていた肖像画の中のゲゲン活仏と自らが住む土地の王を尊敬崇拝してきた彼等にとって、その話はいささか不思議なお伽噺を聞くようであったであろう。しかし、授業を通して幾度となく聞かされるモンゴルの青史に登場するチンギス・ハーンの覇業が、草原に大軍を率いて勇躍するチンギス・ハーンの姿がいつしか彼等の心に浸透し始めていった。その従兄弟の話に引き込まれていった彼の目には、従兄弟の姿がチンギスハーンに付き従う精鋭の一人に見えたのであろうか。今彼のゲルに祀られるパンチェンラマ活仏の肖像画の横には、10年ほど前に息子が買い求めたチンギス・ハーンの肖像画がならび飾られている。

3．祝いの門出

彼の住むゲルは息子二人のゲルを両脇に従えるように立っている。そしてゲルの裏手には息子たちがそれぞれ煉瓦作りの家屋を新築し、次男の家屋には彼と妻の部屋も用意されている。そこにはゲルには置くことのできない背丈の高い洋服箪笥や天蓋付きの寝台もある。そして磨き込まれたステンレスの流しの横にはプロパン用のガスレンジがあった。彼には男２人、女３人の子供がおり、すでに孫は12人となっている。

彼は16歳で嫁を迎えた。相手は近くのアイルに住む娘であった。同じアイルに住む既婚者でしっ

かりした者に、娘方との仲をとりもってもらった。初めて嫁となる娘の家に行ったのはそれから間もなくで、ハダク（贈答用の絹布）と銀の指輪と耳飾りを持って行った。娘のゲルに着いて馬を降りるときには、鐙が震えるほど緊張したという。ゲルに入ると自分の名前と三代前のまでの名を、父親に教えられたとおり告げ挨拶をした[7]。

挨拶を無事に済ませた彼は、両手にハダクを捧げ、その上に指輪と耳飾りを載せて娘に差し出した。娘がそれを受け取りボルハンの前に置き振り返ると、母親から真っ白なハダクが手渡された。彼の用意したハダクと娘のもつハダクが膠で繋がれると、それを二人でボルハンの前に供え、婚約を報告し二人が永遠に別れぬようにと祈りを捧げた。婚約が決まると直にラマ僧に頼んで結婚の日取りを占ってもらう。期日が決まるとそれを再び娘の元に届け、娘の父親にその紙を渡した。これでいよいよ結婚の準備が始まるのである。彼ははじめにこれまで住み慣れたゲルをでて、新居となる新しいゲルを建てた。まず家財道具のうちタンスと寝台を運び込み、太陽の方角である南東にハガルカ（門扉）がむくようにし、それに柳を加工して作ったハナ（壁木）を結わえて固定すると、都合4枚のハナを建て回し太縄で周りを締めつけ側壁が出来上がった。次に円形のトーノ（天窓）の周囲にオニー（屋根木）を差し込み、片方はハナの上端に架けて、そしてトーノを下からバガナ（棒）で支えることで骨組みは完成した。出来上がったゲルに真新しいエスギ（フェルト）を被せ、羊の脂を塗りつけると、最後に天からやってくる神霊の出入り口であるトーノにハダクを結びつけた。出来上がったゲルに祈りを捧げ、彼はここに迎える娘を想い、結婚を実感したという[8]。

結婚式の当日、彼は真新しい弓と花嫁方への贈る祝いの品を持って、一族の長老と仲人、そして数人の仲間と連れだって新婦のアイルへと向かった[9]。同行する人々の中で彼の身を包む青色のデールは一際鮮やかであった。新婦側では彼等一行を迎えるために、特別に新しいゲルが設けられていた。到着するとゲルの入り口に立つ嫁方の親族から「花嫁の名は何という」「花嫁の年齢は幾つか」といった謎かけがおこなわれ、さらに羊の骨付き脛肉が差し出され、それを捌いて見せろという。花婿である彼は謎かけに応え、自らのホトガ（蒙古刀）を取り出し骨付きの脛肉を見事に捌いてみせた。周りはそれをみて囃し立て、喝采を贈った。そしてすべてに応えた彼は初めてゲルに入ることが許された[10]。

彼は携えてきたアイラグと幾種類かの乳製品を花嫁の父母に渡した。そのアイラグは皆の前で花嫁方のアイラグに注ぎ足された[11]。花婿には父親から矢が、母親からはデールがそれぞれ贈られ、花婿はホド（父親）とホドガイ（母親）に感謝の詞を述べた。そしてアイルの長老が謳う祝詞は、ゲルのトーノから天に届けとばかり高らかに、そして朗々と続けられた。

彼は花嫁方での祝いを終ると、叔母達の手によって髪型を整えられた花嫁とゲルを出た。そして再び長老が謳う門出の祝詞が響き渡る中、母親にアイラグを降りかけられ浄められた花嫁は、彼が用意した馬に跨り新居へと向かった。花嫁方の一行もそれにつき従い、戻りの道中は行きにもまして大勢の馬群をなした。途中、アイルの男達が馬に乗ってやってきて、口々に花嫁を囃し立てると、彼は「降った雨は晴れるもの、集まった客は帰るもの」と叫び、花嫁に近づく男達を手にした弓で追い払った。ゲルに近づくと花婿と花嫁は馬を降り、野に焚かれた火にあたった。そして今度はゲルの前にバガナ（棒）を持って立ちはだかる彼の親族と仲間から、花嫁とその一行に向かってさまざまな謎かけが行われる。「火がなくても煮炊きできる鍋を持ってきたか」「火がなくて煮炊きできる鍋なんぞどこでも聞いたことがない」「鵞鳥の乳から作ったチーズを持ってきたか」「鵞鳥という鳥からチーズがとれるものか、卵をうんで育てるものだ。この地に乳が不足しているなら、戻る人々に取ってこさせよう」といった具合である。この問答を無事終えた花嫁は、バガナを跨いでゲルへと進む。そして花婿の両親の後に従ってゲルに入った。そして差し出された乳を飲み干すと、続いて羊の脛骨を花婿花嫁二人が握りしめ、ボルハンの前で線香と蝋燭に火を灯し、天に祈りを捧げる。最後にトルガ（五徳）の置かれる囲炉裏に拝火し、マランザド（火神）に祈りを捧げた。この時三本足のトルガの右足の位置にホド（父親）が、左足の位置にホドガイ（母親）が、そして手

前の足の位置に花嫁が、それぞれ跪き共に祈った。これをもって正式に嫁として迎えらる儀礼は終わり、これ以降花嫁は舅と姑に対しホド・ホドガイと呼ぶことが許される。

一通りの儀礼が終わると宴会が始まる。アイルの長老からは二人に生活を送る上での教訓が滔々と述べられ、「未熟者の心得と成せ」と教えられた。そして祝宴の始まりにオルティンドー（長歌）が謡われると、いよいよアイラグが振る舞われ、祝いの席に欠かすことの出来ない大きなオーツ（羊尾の丸煮）が運び込まれ、飲むほどに酔うほどに歌が謡われ祝宴は続いた。そして人生最良にして最も長い一日の終わりも歌で締めくくられ、参加した客たちがゲルを出て帰路につく頃には、天空に星が瞬き始めていた。

やがて喧騒が過ぎ去り静けさを取り戻したゲルには、花婿花嫁の二人と介添え役として彼の姉と花嫁の兄嫁だけが残される。そして花婿と花嫁はそれぞれの介添え役に導かれ、エスギで周りが囲まれた寝台の中へと進み、花嫁がこの日持ってきた真新しい蒲団に二人は寄り添い、初めての同衾を迎えたのであった。

同道してきた花嫁の母親は、このあと二日間は居残り、嫁となった娘に心得をあれこれ教え諭し、いよいよの帰り際には娘を跪かせ、その衣裳の裾に白と黒の石を一つずつ置き、「この土地に娘が落ち着きますように」と願いを込めて帰っていった。そして入れ替わるように三日目の朝、初めて嫁の父がやってきて、エルゲルトナイル（再訪の宴）が催された。義父も嫁となった娘の様子を伺いながら、母親と同様に帰り際に娘を跪かせた。そして今度は衣裳の裾に火打ち石をおいて、「この地のマランザドを守れますように」との願いを込めて帰っていった[12]。

彼は「あの頃の羊は今よりもずっと美味しかった」と結婚式の日に出されたオーツの話を懐かしそうに話した。「初めての子供が産まれた日に食べたオーツも美味かった」という彼の脳裏には、羊毛皮にくるまれて眠る長男を抱く妻の顔が浮かんでいるのであろうか。秋の夕陽を横顔に受け「最近の羊は昔ほど美味くない。でも息子の嫁が作るから文句はない」と語った彼の横顔は、微笑むたびに切れ込む頬の皺が一層深く切れ込んでいた。

4．まとめ ―「記憶」にみる虚と実―

日本人にとってのモンゴルとは、その蓄積された文字資料の量の膨大さをみても、どれほどの意味をもつものであったか伺い知ることができよう。それは日本が近代以降大陸へと歩を進め、やがて軍事侵略の道へと舵をきるのに端を発している。そして日露戦争後の1907年（明治40）には、軍事力に守られたものとはいえ、研究を目的とした鳥居龍蔵による本格的な調査がモンゴルで行われている。それと同時にその妻鳥居きみ子も日本人教師として招聘され、その滞在期間を利用して『土俗学上より観たる蒙古』（大鐙閣　1927）という旅行記を著している。しかし彼等よりも一足早く、モンゴルの大地に立った日本人もいた。それは、開戦前夜のカラチン王府に創設された毓正女学院で教育に従事する者、それに付き添いながらモンゴルの地図を描く者、そして単独でモンゴルの草原を横断を試みる者などであり、それぞれが個々の目的を胸に抱き、異境であるモンゴルの大地をそれぞれの視野の中におさめていったのである。

本稿では、そのモンゴルで物語られる日常を場として、大きな意味での「モンゴル文化」を想起することを第一の目的とした。それは一定の人々に共有される考え方の枠組みや規範、行動様式といった、いわゆる「文化」を個人の語りから照射する試みである。第二にはその手がかりとして人々の「記憶」に注目し、「記憶」に基づいて語られる回想や証言を例証や傍証とするだけでなく、そのまま「モンゴルの記憶」と位置づけることで、そこから新たな視点を引き出すことを目的とした。

まず第一の目的とした個人の語りから「モンゴル文化」を照射する試みでは、話者本人の経験に基づき婚姻儀礼に関する聞書きを中心にまとめてみた。そこにはモンゴルで伝統的とされる儀礼のあり方と、そこに現れる基礎的な社会組織であるアイルあるいは姻戚関係について見て取ることができた。特に花婿・花嫁が両家に父母をそれぞれ「ホド（父）」「ホドガイ（母）」と同様に呼び慣わすのは、姻戚関係となった二つの社会集団の関係が平等であることを示していることが理解されよ

う。

次に第二の目的に対しては、自らは広大な草原で悠々と生きる「蒼き狼」チンギス・ハーンの末裔であり、馬上にあって草原に暮らし、羊をはじめとする家畜の遊牧を営むモンゴル民族であり、それを誇りとして生きてきた古老の記憶に基づいてその様子をまとめてみた。

ここで特に本稿と深い関わりをもつのが、日本人によって建てられた「蒙彊学院」である。この蒙彊学院は1939年（昭和14）に設立され、わずか6年、終戦とともにその寿命を閉じた。以下『蒙彊（中央）学院史』によってその概要について記しておく。

蒙彊学院は張家口につくられた「蒙古政府唯一の国立学校」であった。その設立は1939年（昭和14)、蒙彊連合委員会が公布した「蒙彊学院官制」により、それまであった察南学院、晋北学院、蒙古学院という官吏養成を目的とした三つの学院を統合する形で造られた。その目指すべきは「日・漢・蒙・回の民族共和」を基本方針とし、その四民族による「王道楽土」を拓くことにあった。

このように草原の学校「蒙彊学院」は、「国造りのための中堅官吏の養成」という目的にそって日本人の手によってつくられたものであった。そして注目すべきはその中心的役割を果たしたと思われる蒙古聯合自治政府の最高顧問が、元南満州鉄道の衛生課長にして満洲青年連盟の指導的役割を果たした金井章次であり、それは満州にあった大同学院をモデルとしたという事実である。そして副院長には文部省の推薦で社会学者の田辺寿利が着き、150名の日本人学生が第1期生として渡蒙した。興味深いのはその卒業後の進路で、蒙古政府機関では総務部8名、民生部55名、治安部18名、司法部3名、財務部10名、産業部20名、交通部7名、牧業総局12名、地政総局3名、蒙彊学院4名となっており、民生部55名が突出していることがわかる。この民生部こそがモンゴル人の生活状況を把握し、指導教育をおこなうための部局であり、その監督権をもつ帝国日本が何を考え、そして何を目的としてこのような配置にしたのかはもはや明白であろう。

そして彼の地張家口とは蒙古聯合自治政府の首都であり、現地財団法人として蒙古善隣協会がおかれ、その調査部が多岐にわたる成果をあげたことは良く知られるところである。そして1994年（昭和19）には西北研究所と姿を改め、本格的に内陸アジアの調査研究が開始されたのである。やはり夫が西北研究所の所員であった磯野富士子が記した『冬のモンゴル』（中央公論社　1986）の「あとがき」で彼女はこのように回想している。

> もちろん、私たちがあのような調査を行うことができたのも、内モンゴルが日本占領下にあったからこそであった。個人的には政府や軍部とは全く無関係な研究のつもりではあったが、西ウジムチンに入ることができたのは、その土地の「日本人顧問」の方々のお世話を受けたからに外ならない。あの方々にしても、主観的には、モンゴル人のためにも、日本の指導が必要であると信じておられたのであろう。

この磯野の言葉にある、モンゴル人のための「日本の指導」の一環として、まさに草原に突如として出現し、教育の名の下に「チンギス・ハーン」を再生・普及させたのがソルガゴリ（学校）なのであろう。そして古老の記憶に留められた「ノイン（役人）とバインフン（分限者）の子弟ばかりが通ったソルガゴリ」こそがそれであり、「教師として日本人と共にやってきたモンゴル人」とは、バトハガルカ（張家口）の学校、つまり「蒙彊学院」を修了した者たちだったのである。

ここまで見てきたように、日本との関わりでモンゴルを見たとき、その膨大な文字史料の陰にあって語られぬ「歴史の闇」の存在を認めることができよう。本稿ではその光と陰によって糾われる縄を頼りとし、古老に記憶される世界について注目してみた。

1920年代、中国大陸では清朝が瓦解していく中、あるいは大国ロシアの南進、さらには日本の軍事侵略が加わった時代、モンゴル民族は分裂と統一の間を大きく揺れ動いた。そしてこのような歴史に積極的に関わり、人々の記憶に留められるデムチクドンロプ（徳王）に対する評価は極めて淡々と物語られ、いわば平凡なものであった。問題にされねばならないのは、この平凡がいかにして作られたもので、その平凡の内容がいかなるものなのかを見つめることである。しかし、そこで語ら

れた帰属意識の創出には、蒙古聯合自治政府ならびに蒙疆学院の意図という、他者による意志が少なからず関わっていたものであることは明らかである。

確かにモンゴル民族は、漢民族支配あるいは清朝支配からの脱却と独立を目指し様々な方策を試みた。そしてついには蒙古聯盟自治政府を立ち上げたものの、国共内戦期を経て最後に彼等を待ち受けていたものは民族の分裂という結果であり、駐蒙日本軍とともに戦い散った蒙古軍兵士の二度と帰らぬ現実であった。しかし常にその背後にあった大日本帝国政府の意図と構想は忘却の彼方へと追いやられ、やがて草原の彼方に漂うロマンの地へと言説は置き換えられてきたのである。

しかし、ここで集団の記憶としての「歴史」と平凡な日々に生きた個人の記憶である「語り」との差異を、安易な二項対立の形で問うことは誤りであろう。なぜならば後者の個人の記憶とは、帰らぬ無惨な同胞の痛みを乗り越え、自らの足で生き生活を営んできたモンゴル民族の心であり、明日を切り拓いてきた精神そのものであるからである。そしてそれこそが「モンゴルの記憶」なのであるから。

最後に本稿を編むにあたって、快く調査に応じてくれたM氏と調査はもとより貴重な助言を与えてくれたモンゴルの友人達に、この場をお借りして厚く御礼申し上げる次第である。

【註】

(1) 「記憶」を巡る研究はもはやブームと呼んで差し支えない状況となっている。これは森村敏己によれば1984年にピエール・ノラ編集の『記憶の場所』が出版され、それ以降のことであるという（阿部他編　1999　225頁）。その広がりはもはや歴史研究にとどまらず、多くの分野で関心を呼ぶテーマとなっている。しかし本稿はその展開を詳細にすることは目的になく、関連するものに限って紹介するにとどめることとする。それは「記憶」という視点から人々の営みを見直し、そこに物語られる世界の把握と形成のあり方を通して、人々の意識を再検討することを目的とするからである。

(2) 高桑守史は『日本漁民社会論考　－民俗学的研究－』の第１章において、「民俗学は生産あるいは再生産されてきた生活事実・理念＝民俗を通して、それを担っていた人＝常民の生き方を、一定の時間的パースペクティブの中でとらえることを本願としていた」と述べ、柳田國男の死後、主体である常民が軽視され、客体である民俗のみが取り上げられる傾向に対し警鐘を鳴らしているとする。つまり伝承主体である常民の生き方の多様性を認識した上で、民俗事象を論ずるべきとしている。尚、ここで高桑が用いた「伝承主体」という用語については、第２章の第１節「伝承主体の意義」において精確に論じられており、それまでの伝承母体という語が集団表象としての地域を指示するものであったのに対し、伝承主体は民俗を生成し、保持管理し、変革する主体としての個人およびその集団を強調するために用いられたとする。

(3) 古家信平は『火と水の民俗文化誌』において、宮本常一の『宝島民俗誌』に検討を加え、調査地において個人から得た資料を「全体」にまとめ『民俗誌』に仕立てていく方法に注目し、そこに「個」への執着を認めた。そして宮本が「調査する側」の主観によって結果に違いが生ずることを指摘したことに対し、「話者のおかれた立場や役割とそれに規定される体験によって保持している知識が異なる」と述べている。さらに自身の調査地である沖縄本島北部の辺野古集落における長年の調査結果を「話者の話す内容は、調査時現在の、過去のある事柄についての話者の評価であり、過去の事実ではない。」とし、火と水の信仰を視角とし、「個」を丹念につなぎ合わせて「全体」を描こうとした。

(4) たとえば高木史人の「昔話の伝承動態・β－昔話の伝承形態・伝承機能モデル」があげられる。

(5) 中込睦子は「認識と記述」において、人々にとっては生活そのものが選択の結果であり、聞書きの場で語られる事柄も話者の選択の結果であると指摘し、その選択の結果をさらに調査者によって解釈されるのであるから、厳密な客観性を求めることに余り意味は無いとする。そして聞書きという行為そのものが調査者の体験であることを考え併せて、調査者自身の問題関心

の立ち上がり方や変化について記述される必要性を述べている。(『現代日本民俗学入門』吉川弘文館　1996　14-20頁)

(6) モンゴルでは伝統的に70歳、85歳、90歳の誕生日を盛大に祝う。彼は記憶を辿りながら、いろいろな出来事を振り返った。彼の右手に広がるなだらかな丘陵には牛の群が点々と散り、その人生は決して平穏で楽しいだけの毎日ではなかった。彼の父親は西ウヂムチン王府のヂャラン（寺廟管理部）に出仕していた。そして永く続いた清王朝は滅び、北のハルハ（モンゴル国）が独立した頃、その職を退いたという。彼の母親は男二人、女二人の子供を産んで、末子である彼を産んでまもなく死んだために、彼に母親の記憶はないという。

(7) 父系社会であるモンゴルでは自らの出自を明らかにするために、氏族の先祖を三代以上記憶していなければならない。それはオボック（姓）を同じくする者を同族と見なし、同族婚を禁忌とするため、このような形式が守られてきたのである。

(8) モンゴルでは結婚とゲルの結びつきが強い。定住化が進む現代において住居形態の変化は著しく、それに伴う家族形態のあり方も変容している。そのような中にあってもなお新婚当初はゲルで過ごすという話もある。

(9) このような花嫁方の迎え方は、儀礼としてモンゴルでは古くからみられるものである。これは結婚の申し込み段階からみられ、仲を取り持つ人の力量も試され、儀礼的に何度か拒否した後に承諾するというように段取りが決められている。ここで結婚式当日に行われたという花嫁方から出された様々な要求も同様のもので、それが出来なかったからといって花婿の力量が試されたり、ましてや決して婚姻が破棄されるといった性質のものではない。

(10) かつて遊牧を営み、時に狩猟を行っていたモンゴルでは、ここに登場する弓矢はその男の能力を象徴する道具としての役目を果たしたと理解される。しかし狩猟が行われなくなった時代の彼は一対になった弓矢をただ持ち帰ったといい、そこに特別な所作を伴う儀礼は無かったという。

(11) この儀礼は正式に婚姻が承認されたことを意味する。それは婚姻がそれぞれの家同士の結びつきと考えられるモンゴルでは、双方の家で造られたアイラグを一緒にすることで、それを象徴的に表しているのである。

(12) 母親の願いと父親の願いは、いずれも嫁いだ娘がその地に末永く留まり、幸せに暮らすことを祈り上げたものである。このようにモンゴル民族には婚姻儀礼が重要視される。血縁関係が強固であるがゆえのことと考えられるが、同様に姻戚関係にある人々が父母をはじめ多様な役割を果たしていることが理解される。

(13) 帝国日本が軍部主導で大陸へと侵略していく中、そこに繰り広げられた人間の生き様を、個別具体的に歴史の中に立ち上げたものとして大濱徹也の『明治の墓標』がある（大濱　1970)。本稿との関わりで述べれば、日露戦争開戦に到る展開の中でモンゴルに迫った個別具体像が描かれている（大濱　1990　112-132頁)。また、逆にモンゴル人でありながら二度の日本渡航を果たし、モンゴル語教育に従事したロブサンチェタンのように、満洲国建設に夢をもったモンゴル人もいた（辻　1998-99)。

(14) その短命さ故であろうか、これまでその実態について詳細に語られることは少なかったが、1992年に学校法人安城学園で『蒙彊（中央）学院史』が編まれたことで、その姿を窺い知ることができるようになった。その書は安城学園の前理事長であり、また蒙彊（中央）学院同窓会会長である寺部清毅氏の手によって編まれたもので、そこに記される「われわれの生涯の痛恨事は、一生を捧げ尽くそうとして渡蒙した大志が、終戦によって挫折したことであります」の言葉が、その学院がいかなる存在であったかを雄弁に物語っている。

(15) 蒙彊連合委員会は後にデムチクドンロプ（徳王）等が活躍する蒙古聯合自治政府の母体となり、大日本帝国の支持を受け、中国からの独立を目指した。

(16) 満洲青年連盟については伊藤武雄の『満鉄に生きて』(勁草書房　1964）にその成立、目的等が詳しくまとめられており（伊藤　1964　168-174頁)、そこに金井章次の名を見ることができ

る。また高津彦次の『蒙彊漫筆』（河出書房 1941）にも金井の名は表れ、日系官吏としてハルビン、奉天等の総務庁を歴任したとある。

(17) 蒙彊学院は1941年（昭和16）には蒙古政府の機構改革にともない中央学院と改称し、院長には黒岩義勝中将が着任し、その活動は敗戦とともに停止された。

(18) 人類学者梅棹忠夫は西北研究所について「純粋なアカデミックな研究所として、中国の西北地区すなわちモンゴル以西の内陸アジアの本格的な研究をはじめようというのである」と述べている。西北研究所は所長に今西錦司、次長に石田英一郎が着き、その研究活動の内容については本田靖春『評伝　今西錦司』に詳しくまとめられている。また、1939年（昭和14）に単身渡満した民俗学者大間知篤三は新京にあった建国大学に赴任した。そして旺盛な調査を行い、その報告書は『著作集』の６巻にまとめられている。このように当時の知識人集団の軌跡を辿るだけで大変な紙片を要するほどに活動は行われていた。この問題については中生勝美が「満洲民族学会の活動」として丹念にまとめており（中生　1994）、寺田和夫は当時の人類学系研究機関についてまとめている（寺田　1981）。尚、これら一連の成果をまとめて俯瞰するには川村湊の『「大東亜民俗学」の虚実』がある。

＝主要参考文献＝

阿部、他編　1999　『記憶のかたち』柏書房

磯野富士子　1986　『冬のモンゴル』中央公論社

伊藤　武雄　1964　『満鉄に生きて』勁草書房

大濱　徹也　1970　『明治の墓標』秀英出版
（【文庫版】1990　河出書房新社）

川村　湊　1996　『「大東亜民俗学」の虚実』講談社

学校法人安城学園　1992
『蒙彊（中央）学院史』学校法人安城学園

佐野、他編　1996　『現代日本民俗学入門』吉川弘文館

高桑　守史　1991　『日本漁民社会論考　－民俗学的研究－』未来社

高津　彦次　1941　『蒙彊漫筆』河出書房

辻　雄二　1998　「羅布桑却丹著『蒙古風俗録』（一）」
『琉球大学教育学部紀要』52集

鳥居きみ子　1927　『土俗学上より観たる蒙古』大鐙閣

中生　勝美　1994　「植民地の民族学　満洲民族学会の活動」
『へるめす』52号　岩波書店

古家　信平　1994　『火と水の民俗文化誌』吉川弘文館

本田　靖春　1992　『評伝　今西錦司』山と渓谷社